

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

BORDERLESS HERITAGE

無形文化遺産と音楽研究

福岡 正太 民博文化資源研究センター

無形文化遺産の制度は、有形の世界遺産に似たものと思われがちだが、当初から担い手を重視していた点が異なる。二〇〇六年の条約発効は、担い手だけでなく、研究者の仕事も変えつつある。

伝統の消滅を憂う

二〇世紀、世界中の音楽が大きな変化にさらされ始めた。音楽は常に変化すると考えてきた民族音楽学者にとって、もしもある音楽が消えてしまってもいたしかならないことだった。しかし、実際には多くの研究者が、伝統的な音楽の衰退を憂えた。音楽の変化があまりにも大きく、急速であったこと、そして代わりに隆盛したのが西洋音楽の影響を大きく受けた商業的音楽であったことがその理由

の一端である。あるオランダ人の学者は、二〇世紀前半、インドネシアで広く支持されて発展したクロンチョンという音楽が、インドネシアの人びと自らの芸術から遠ざかる原因であると非難した。彼にとってクロンチョンは、欧米のポピュラー音楽をまねたくだらない音楽と映ったのである。二〇世紀後半には、こうした見方に対する反対も起こった。西洋の研究者は、西洋と非西洋の伝統の折衷を必要以上に

さげすんでいるという批判である。インドネシアの人びとがクロンチョンに夢中になったのは、個々の民族集団の伝統とは異なるものをもっており、多様な人びとが「インドネシア」の名のもとに楽しむことのできる新しい音楽だったからだ。そう考えれば、クロンチョンはインドネシア人にとって重要な音楽たといふことができる。今日、この音楽は「伝統音楽」のひとつに数えられることもある。



ラジオの生中継番組におけるクロンチョン。フルート、バイオリン、チェロやウクレレに似たクロンチョンという楽器などを伴奏に歌手が歌う。2009年8月、ジョグジャカルタにて



無形文化遺産としての音楽

二一世紀に入ると、無形文化遺産として音楽が語られる時代がきた。「遺産」ということばには、受け継いでいくべきものという含意がある。伝統的な音楽をいかに受け継ぐかということに多くの人が関心を向けるようになった。これは一見、伝統の消滅を憂えたかつての民族音楽学者の考え方に似ているようにみえる。しかし、無形文化遺産は、コミュニティや集団のなかで代々伝えられ、彼らのアイデンティティ意識をはぐくみ、先人たちのつながりを実感させるものとして位置づけられている。何をどう受け継いでいくかは当

事者が判断すべきと考えられるようになった点だが、かつてとは異なる。世界には、欧米諸国の圧倒的な力を目の当たりにして、現代社会で生きていくために自分たちの伝統を捨て去るべきだと考えてきた人びともいる。そうした人びとのなかでも、自分たちの音楽に再び目を向け、誇るべきものとして伝えていこうという機運が盛り上がりつつある。かつては当たり前のように自分たちの周りにあったものが消えかかっているという認識も、こうした動きを加速させている。



インドネシアの人形芝居ワヤン・ゴレック。人形芝居ワヤンは、2003年、「人類の口承及び無形遺産に関する傑作」として宣言された。2013年、バンドゥンにて

民族音楽学は、さまざまな音楽の伝承の過程についての研究を蓄積してきた。民族音楽学者はその経験を生かし、無形文化遺産保護条約の形

研究者の役割

成や運用において一定の役割を果たしている。条約の採択に先駆けて実施された「人類の口承及び無形遺産に関する傑作」の宣言プログラムにおいて、専門機関として他のどのNGOよりも多くの提案の評価にかかわったのは、民族音楽学者の集まりである国際伝統音楽学会だった。元会長であるアンソニー・シー

ガールは、その評価の過程についての報告を著している。無形文化遺産の考え方が当事者にとっての意義を重視するのであれば、外部の人間が評価をするというのは理屈に合わないようにみえる。しかし、実際に

案件の提案をおこなうのは各国の政府である。必ずしも役人たちが無形文化遺産にかかわる行政の経験をもち、実情を適切に把握しているとは限らない。提案書に記された保護のためのアクションプランが、実情を知らない役人による机上のプランだったこともあるという。対象に精通した研究者は、そのアクションプランにどの程度実効性があり、当事者や関係機関の役割が適切に設定されているかを判断し、意見を付与した。ただし、プランが計画通りに実行されているかどうかをモニターするしくみはプログラムに組み込まれてはいなかった。

研究者が無形文化遺産保護のプログラムへの関与を求められるケースは、これからますます増えていくだろう。プログラムそのもののインシアティブをとるのは当事者であるべきだが、そこに経験や知恵を提供することが研究者の役割のひとつである。

カンボジアの大型彫絵芝居スバエクトム。2005年に「人類の口承及び無形遺産に関する傑作」として宣言された。1999年、シエムリアップにて

